

書評

出来事を思う「位置」と「距離」

——宮地尚子『環状島＝トラウマの地政学』書評——

みすず書房、2007年、228p.

山口真紀*

出来事はそのひとに残していく不具合をトラウマと呼ぶ。出来事のあとにはトラウマが残る。そのことをわたしたちは既知に知っていて、出来事の知らせに触れたとき、そのただ中にあるひとに招かれ、直面するであろう苦難を思い、胸を詰まらせる。それでただ泣くひともおり、情報を遮断するひと、たまたま出かけて行って手を差し出すひともいる。「胸を詰まらせる、当事者ではない人びと」とは、多くの場合、私たち自身である。自分ではない誰かへの思いは、ときには自身に及ぶ事柄に由来する感情よりももっと強くコントロールできないそれとなり、思う当人を壊してしまうことさえある。こうして、重く苦しい出来事の中にあるひとだけでなく、それを見るひとたちもがまたさらに傷み疲れてしまい、将棋倒しのように共苦が押し広げられていく。それは避けられないのだろうか。

「トラウマについて語ろうとすることは空間に独特の地形をもたらす」[宮地 2007:6]と著書は述べている。トラウマ的事象の周りに登場するのは、当事者と、それを見るひとたち——支援者、代弁者、家族や遺族、専門家、研究者、傍観者、それに加害者である。「独特の地形」とは、こうした登場人物の配置が織り成すものであろう。著者は国外の難民キャンプでの支援活動、セクシュアル・ハラスメント、DV被害者への臨床経験を多く持つ精神科医であり、人類学者でもある。著者は、精神医学的手法によって内奥に生じる心理メカニズムを分析しながらも、決してその個人のみを観るのではなく、そのひとに及ぼしているであろう文化的・社会的背景や、かろうじて保たれている意味世界へとまなざしを向けてきた。著者にとってトラウマについて考えることとは、たとえば「悲嘆」や「適応」といった、訪れる「回復」の段階を数えることではなく、当事者とその周囲の人びとを同一平面上にマッピングし、事象として捕らえられることなのだろう。本著は、「環状島」のメタファーを使って「そこにある力動」の描写が試みられている。細やかな心眼ゆえか、本著ではトラウマをめぐる事象が文語的な言葉で肉付けされている。これらの言葉の選び方は、扇情的であるがしかし同時に、読者の思う「傷ついた誰か」を軸に、物理的・視覚的なイメージを広げることが可能にしている。まずは著者の表現にならない、「環状島」を想像してみよう。

空から望んで見えてくるのは広い海に浮かぶドーナツ型の島である。〈内海〉を持ったその島は「環状島」と呼ばれる。「環状島」はトラウマごとに形成され、それについて語る者はこの陸地のどこかに位置することとなる。〈内海〉の深淵は、出来事を中心である。そこに傷ついたひとがいる。そのひとは水の中にいて話すことができないか、あるいは既に息をせず話すことをしない。足が地に届いて、浅瀬に向かって〈内斜面〉を上るに従って、波打ちぎわでもがくひと、呼吸を取り戻すひとがいる。息を整えて〈尾根〉まで登っていけば、そこからは島が一望できる。既に分かるように、この道筋は当事者が声を発するに至る心的過程でもある。反対に、〈外海〉から〈尾根〉に登ろうとするひともいる。それは支援者であり、助けになるべく〈外斜面〉をよじ登ろうとする者である。この〈尾根〉を挟んで当事者と支援者は出会い、「環状島」を縁取るのである。また、人びとの間に生じる様々な事象は〈風〉、〈重力〉、〈水位〉による。〈風〉は当事者と支援者のあいだにも生じる対人関係の混乱や葛藤、〈重力〉は中心点に引きずりこもうとするトラウマ反応や症状、〈水位〉とは社会の否認や無理解度を示している。ここは自然にできた地形であるから、〈風〉や〈重力〉は常に存在する。著者はこのように言うことで、当事者と支援者が手を結んだ運動内

* 立命館大学大学院先端総合学術研究科 2006年度入学 公共領域、日本学術振興会特別研究員(DC2)

部での軋轢や内輪もめは、構造として生じ得るものであり、責任主体を探す必要はないと知らせている。

「環状島」の大きな特徴は、〈内海〉をたたえた中空にある。著者は、中心が頂上となる「円錐島」と比較させることで、最も経験の中心にいるひとが最も語る言葉を持つ（最大発話者）という認識の転換を迫っている。出来事の只中にあるひとや思いは語る位相にない。語り出されるときに困難に深い洞察を注ぎながら、なお著者が生き延びた者、語る能力を持つ者の存在を強調するのは、不正義な出来事が沈黙のうちに不可視化され、記憶から消滅していく事態への怒りゆえである。それは、本文中に幾度も引用されるハーマンの次の言葉にこめられている。「すべての加害者が要求することは、傍観者は何もしないでくれということだけだ」[Herman 1992=1996]。この主張に頷きながら、私自身の関心からやはり立ち止まってしまうのは、語る営みは身を引きちぎるような行いともなるという、まさに著者が示した視角である。語り得ることが当事者である条件ではない。そうであるにもかかわらず時に私たちは、当事者に語りを期待し、出来事の真偽の証明まで負わせてしまっていないか、常に心に留め置く必要があるだろう。

「環状島」を下敷きに、著者は出来事の周りの事象をひとつずつ展開させていく。はじめは海に沈んで〈尾根〉の先端が覗くだけの「環状島」が、〈水位〉の低下によって浮上し姿を現わす過程は、クレームの異議申し立てによって社会問題が生成されていく過程と重なる。3章4章においては、セクシュアル・ハラスメント裁判の原告の手記から、当事者が声を出すまでにいたる葛藤と、支援者である運動団体との結束やそこで生じた誤解などの様相が読み解かれる。また、5章6章においては複合的アイデンティティの概念に照らしながら、自己がそうであるようにトラウマもまた多義的であり、「環状島」が重なったり、複数を同時に抱える場合の想定を促している。8章では加害者の位置——〈内海〉中心点の上空だが、そこにはもういない——、9章10章では研究者の手法——地を這い〈尾根〉に近づく方法、ヘリコプターで上空から接近を試みる方法の特質と留意点——と、知の役割——〈水位〉を下げるために——について論じられている。

本を閉じるころには、読者は個別具体的な事例を「環状島」のメタファーに置き換え、独自の地図を描けるようになるだろう。では、こうして出来事を鳥瞰に眺め、配置を知る試みは、トラウマをめぐる問題をどのように理解する助けとなるだろうか。

地形を描く試みは、出来事をめぐる自身の「位置」を明らかにする。この「位置」への問題意識は、主に7章に「ポジションナリティへの問いかけ」と題して論じられている。ポジションナリティとは、西欧諸国のフェミニストによる第三世界の女性への言及が、代弁の暴力や知の欺瞞として働いたことに端を発し、「誰が、誰に向かって何を言えるのか」といったかたちで発話者の「位置」を問い返すものである。著者は、当事者と支援者とは、そこから逃げられるかどうかにかんして決定的な「位置」の違いがあると言う。「当事者は逃げるができない」と釘打つ言葉に聞こえてしまいかねないにもかかわらず、この違いを言わねばならないのは、支援者が当事者に成り代わって発言し、当事者の経験を篡奪してしまう事態への危惧があるためだろう。出来事における自身の「位置」を知ることは、無自覚的に行使される力への自省となるのである。

ただ、私にはこの志向はときに新たな苦しみを呼ぶようにも思われた。たとえば原告の女性が「自分が裁判を起こしたことで、「私の後に続け」と無言のうちにすべての女性を強制していたのではないか」[宮地 2007:48]と考えたように、当事者であったはずのひとにも、「位置」への自省は折り返される。ある行為が誰かの何か大切な感情に暴力的に介入しているのではないかという警鐘は、あまりに正しく説得的であり、優しいひとの深くに根をはる。そして眼前の傷に対して、「触れられないが見続けなければならない」という強い倫理的な態度を起こさせる。当事者ではないが周りにいるひとは、そのひとの苦しみを軽んじることのないよう気を張りつめる。そして共に在ろうとするときは次のように呼びかけもする。「私が、彼女の苦しみを苦しむのはなく、私自身の苦しみを苦しんで始めて、ひとつの出来事が彼女と私のあいだで分有される」[岡 2000:227]。このとき、当事者と「私」の「位置」の境をヒリヒリとした共苦の磁場が走る。悲しい出来事を分有するということが、この共苦を避けながらも可能であるように、問いを向けられないだろうか。

もし自身の動かしがたい「位置」にこだわっても苦しいなら、「距離」を考えてはどうだろうか。事象を俯瞰から描く試みは、出来事から「距離」をとる志向へとも開かれているはずである。「私たちはトラウマを受けた人たちにどの程度の共感を寄せるかを、出来事との距離によって決めているところがある」[宮地 2005:13-14]と著者も前著

に指摘しているように、共感とは、自己の内発的な契機によって呼び起こるが、同時にその時々々の社会条件による制約も受けている。「距離」は物理的なそれと、心理的なそれとに分けられるが、これまでにおよそ問題となってきたのは、物理的に遠い人びとにどのように心理的に寄り添い、支援を続けることができるかというものであった。しかし私たちは今まさに、遠くない場所で起こっている途方もない悲しみの集積にどう対するか問われている。「共感疲労」や「二次被害」といった概念で、心理的な距離をとることの大切さは既に言われている。問題は、その行いが誰かを見捨て、排することにつながるのではないかという懸念を拭えない点にある。それは拭いきれるものではないが、次のようにも考えていけないだろうか。

ひとつは、私たちは既にトラウマの概念を知っていて、出来事そのひとに残すだろうものを先に見ているということである。「悲痛な思いがこのひとを襲うだろう」と心を震わせている。しかしそれは自身の予期した不安の投影かもしれない、現実のほうが幾分か穏やかに進んでいるかもしれない。現実以上の悲しい意味を出来事に付与して、当事者を「先に」悲しいひとに仕立て上げてしまっていないか。そしてまた関係性の濃淡についても、もっと信じているはずである。自分は離れても、そのあいだを他の支援者が埋めるかもしれない。なぜなら、ひとつのつながりの破れ目は、ひとの思いの偏りによって埋められていくことがあるためだ。私はいつも誰にも優しくはいられない代わりに、誰かにあるとき特別に思いをかけた。そのひとが放っておかれてるように思われて、妙に気にかかったりする。私たちは、心理的な距離を足したり引いたりしながら、周りのひとと関係を取り結んでいる。思いがまだらで、いつも同じ量で同じ向きにあるのではないからこそ、ひとがつながり行く可能性もここに見られるはずだ。拙くともこのように考えていくことで、生じる共苦を溶かしていくこともできるのではないだろうか。

出来事を中心に当事者と支援者を同じ地平上に描き起こす「環状島」は、ひととひととが途絶せずつながられる最も遠い場所を示す地図ともなる。それは、ひとの間に積もるかもしれない悲しみを、少ないほうへと向ける助けとなるのではないか。

参考・引用文献

- Herman, Judith Lewis 1992 “Trauma and Recovery” = 1996 中井久夫 訳『心的外傷と回復』, みすず書房
宮地尚子 2005 『トラウマの医療人類学』, みすず書房
——— 2007 『環状島=トラウマの地政学』, みすず書房
——— 2011 『震災トラウマと復興ストレス』(岩波ブックレット), 岩波書店
岡真理 2000 『彼女の「正しい」名前とは何か——第三世界フェミニズムの思想』, 青土社

